

乳幼児健康診査報告書で用いる用語

〈一般健康診査の部〉

1 健康診査の種類

- 乳児一般健康診査
- 1歳6か月児健康診査（内科健康診査 歯科健康診査）
- 3歳児健康診査（内科健康診査 歯科健康診査）
- 精密健康診査
- 2歳児歯科健康診査

2 健康診査の対象

- 乳児一般健康診査
 - 生まれてから満1歳に満たない者で乳児期に公費で2回健診が受けられる
 - 前期健診：生後6か月まで
 - 後期健診：7か月から1歳に達するまで
- 1歳6か月児健康診査
 - 満1歳6か月を超え満2歳に達しない幼児
- 3歳児健康診査
 - 満3歳を超え満4歳に達しない幼児
- 2歳児歯科健診
 - 2歳0か月から満3歳に達しない幼児

3 適正月齢児

- 各健康診査を対象月齢内で受診した児

4 適正月齢外児

- 各健康診査を対象月齢外で受診した児

5 対象外児

- 県内市町村に住民票がない県外児、公費で認められた健診回数を超えた児

6 乳児健診の1回目、2回目

- 1回目：健診の受診が1回目の場合
- 2回目：健診の受診が2回目の場合

7 貧血検査の対象

- 乳幼児貧血を早期発見、早期対応することで乳幼児の健全な成長発達を促すために実施
- 乳児後期健診の受診児
- 1歳6か月児健康診査の受診児

<歯科健康診査の部>

1 う蝕の主な数値

$$(1) \text{ う蝕有病者率 (\%)} = \frac{\text{未処置歯} \cdot \text{処置歯} \cdot \text{喪失歯のいずれかを1歯以上もつ者の数}}{\text{被検者数}} \times 100$$

$$(2) \text{ う蝕有病歯率 (\%)} = \frac{\text{未処置歯} \cdot \text{処置歯} \cdot \text{喪失歯の合計}}{\text{被検歯数}} \times 100$$

$$(3) \text{ 一人平均萌出歯数 (本)} = \frac{\text{被検者全員の健全歯} \cdot \text{未処置歯} \cdot \text{処置歯} \cdot \text{喪失歯の合計}}{\text{被検者数}}$$

$$(4) \text{ 一人平均う蝕数 (本)} = \frac{\text{被検者全員の未処置歯} \cdot \text{処置歯} \cdot \text{喪失歯の合計}}{\text{被検者数}}$$

注) 喪失歯とは、むし歯による喪失歯を指す

2 A・B・C型別分類

1歳6か月児健康診査

乳歯う蝕罹患型		現症	予後の推測
O 型	O ₁ 型	う蝕もなく、かつ口腔環境がよい (危険因子が少ない)	う蝕感受性は低いものと思われる
	O ₂ 型	う蝕はないが、口腔環境が悪い (危険因子が多い)	近い将来、う蝕発生の可能性が強いと思われる
A 型		上顎前歯部のみ、または臼歯部のみにう蝕がある	う蝕感受性は低い
B 型		臼歯部および上顎前歯部にう蝕がある	う蝕感受性は高く、広範性う蝕になる可能性もある
C 型		臼歯部および前歯部すべてにう蝕がある (下顎前歯部のみにう蝕を認める場合も含む)	う蝕感受性は著しく高く、広範性う蝕になる可能性が強い

3歳児健康診査

乳歯う蝕罹患型		現症	予後の推測
O 型		う蝕がない	
A 型		上顎前歯部のみ、または臼歯部のみ にう蝕がある	う蝕罹患型からみると、比較的程度の軽いものである
B 型		臼歯部および上顎前歯部にう蝕がある	上下左右の臼歯部すべてにう蝕がある場合は、う蝕感受性がかなり高く将来C ₂ 型に移行する可能性が強い
C 型	C ₁ 型	下顎前歯部のみ にう蝕がある	
	C ₂ 型	下顎前歯部を含む他の部位 にう蝕がある	う蝕感受性はきわめて高い